

2013年8月4日・朝日新聞「読書」欄では

自分と切り離せない広島

詩集・八月の夕凧 俳優斎藤とも子さんの「思い出す本 忘れない本」

阪神大震災の直後、テレビの取材でタイの山岳民族を訪ね、生きる意味をあらためて考えました。15歳で芸能界に入った私は高校を中退していたので、もう1回勉強したくなり、大検（大学入学資格検定）を受け、4年目の受験で大学の社会福祉学科に入りました。

同じころ、井上ひさしさんの「父と暮せば」の娘役の依頼が届きます。原爆はあまりに悲惨で入り込むのが怖かったのですが、この戯曲には希望があるし、やらせていただくしかないと思いました。

広島ของ空氣を感じたくて訪ね、たまたま入ったお好み焼き屋さんで、被爆した女性と出会い、縁が広がっていきます。大学院では、母親の胎内で被爆した・「原爆小頭症」の方たちが生きてきた記録を残したいと修士論文にし、本にもしていただきました。広島は、自分が生きることと切り離せなくなったのです。

上田由美子さんの『八月の夕凧』の中の詩は、朗読もしています。

広島の夏は

街全体がこの時 静止する

晩景 色を伏せ

黙禱するかのよう^{もくとう}に夕凧に従う

という表題作。風がなくなる夕凧には、亡くなった方の霊も出てきているのかもしれない。

呉市に住んでいた7歳の上田さんは、原爆投下の数日後、広島市に入って被爆しました。どんな言葉もうそになる、と書くことも話すことも封印したそうです。60年ほどたって「沈黙しては忘れられる」と、書き始めました。一見、生々しい描写はありません。60年の距離感が読む人の想像力を働かせ、より深く考えさせてくれます。「靴を脱ぐ」という詩。

その老人は 公園では靴をぬぐ

「公園ん中をのお 靴をはいて歩くこたあ わしにやでけんのお

こん土地ん下にや わしのとうさんやかあさんが 眠つとるけん……」

広島弁が胸にしみ込みます。

もう1冊、忘れられないのは、持田郁子さん『夏草ひろしまおぼえ書き』（^{こみち}径書房・品切れ。電子書籍化の予定）。原爆を伝える難しさを感じていた持田さんは、戦後40年で「破壊される前の広島のたたずまい、人々の息づかいを書いてみようか」と考えます。被爆前の景色が、こどもの目で生き生きと描かれました。小高い山と川。楼並木。黒パンを売るロシア人のおじさん。女学生。それらが一瞬にしてなくなったのです。

この2冊は、人の痛みを深いところでわかっている人が、声を張り上げずに、大事なことは何か、自分で見て考えなきゃダメなんだよ、と教えてくれています。

（コールサック社・2100円）

構成・石田祐樹

と紹介されています。